

申請課題名：第 20 回国際有害有毒藻類学会の運営を通じた若手人材の育成

申請代表者：今井一郎（第 20 回国際有害有毒藻類学会委員長）

報告者：水産研究・教育機構 小原静夏（学会当時：広島大学）

2023 年度の日本海洋学会青い海助成事業として「第 20 回国際有害有毒藻類学会の運営を通じた若手人材の育成」を申請し、採択・助成いただきました。若手会員の海外渡航支援等、日本海洋学会では若手の研究をサポートする様々な制度がありますが、今回は学生会員が国際会議の運営に携わることで海外の研究者と交流しやすくなる機会を提供することを目的として本取り組みを実施しましたので、簡潔にご報告します。

1. 本申請の背景

国際会議は博士課程の学生にとって良き修行の場であるが、金銭的な事情により参加を躊躇したり諦めてしまったりするケースは少なくありません。近年は大学や学会などで旅費や参加費を助成する制度は増えているものの（実際に日本海洋学会の助成によって海外渡航された若手会員も多いことでしょう）、条件によっては援助を得られない場合もあります。特に国内で開催される国際会議の場合、参加費は国内会議と比べて高い一方で、海外渡航を伴わないため助成を受けられないケースが多い。

また若手、特に学生が学会運営に携わる機会はそう多くありませんが、学会運営側として学会に参加することは得られるものも多い。トラブル対応等を通じて自然と国内外の研究者と交流する機会を得られたり、本格的に学会運営に携わる前のトレーニングになったりもします。実際に、本報告を担当している私（小原）も、学部生時に国内会議の運営に関わる機会があり、今回の国際会議ではそのときの経験が多方面で役立ったと感じます。

今回は学生会員に対し、国内で開催される国際会議の参加費の一部を助成するとともに、学会運営の一部を補助する機会をつくるため、日本海洋学会青い海助成事業に申請しました。

2. 本学会について

国際有害有毒藻類学会（International Conference on Harmful Algae: ICHA）は、UNESCO の要請を受けて設立された国際有害有毒藻類学会（International Society for the Study of Harmful Algae : ISSHA）が主体となって隔年開催されている国際会議です。今回が第 20 回大会となり、正式名称は 20th International Conference on Harmful Algae Hiroshima 2023。日本では、1995 年に第 7 回大会が仙台市で開催されて以来 28 年ぶりの開催であり、広島市にあるグランドプリンスホテル広島にて 2023 年 11 月 5 日から 10 日まで開催しました（写真 1）。本会議は、海洋および河川・湖沼に発生し人間や水生生物に致死的な影響を及ぼす有害・有毒藻類（Harmful Algal Blooms: HABs）に関して学術的な研究交流をし、水産業等に対する赤潮・貝

毒の被害軽減、安全な水産物の流通と消費、飲料水の確保などについて国際的な理解を深め、方策を決める場でもあります。また、研究成果の社会・一般市民への還元も重視しています。今回の広島大会では、人と海の共存（HAB Science and Human Well-being）をテーマに、「里海（Satoumi）コンセプト」の下で、世界とつながる海の持続的利用に関して国際的なメッセージ発信の場となることが期待されていました。2018年に開催された第18回大会以降、5年振りの対面開催となった今大会では、39ヶ国から495名もの研究者や行政関係者らが参加しました。また学会の詳細な様子については、日本プランクトン学会報71巻1号をご参照ください。

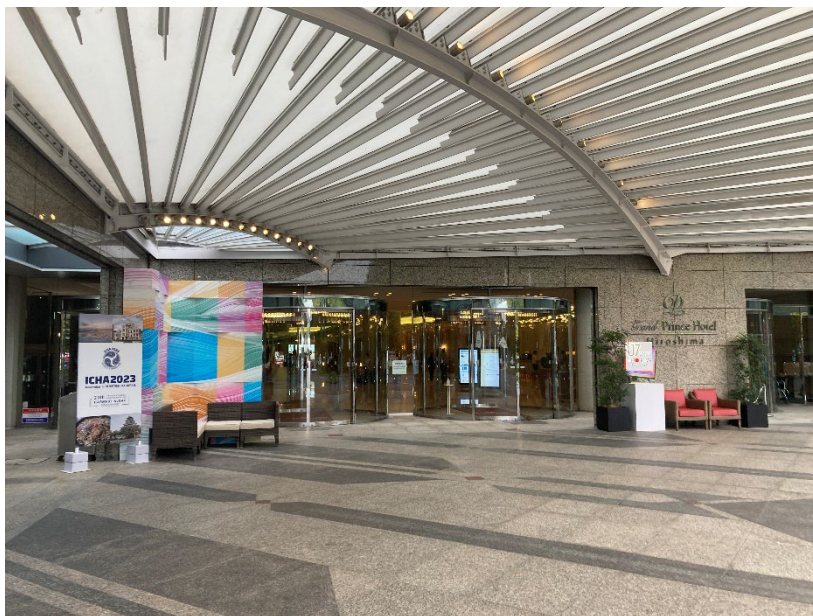


写真1 会場玄関（大会看板とともに）

3. 助成対象学生が実施した運營業務

今回は日本海洋学会の学生会員（学会開催時点）2名、矢野諒子さんおよび Jiang Qiao さんの参加費の一部を補助し、おのおのポスターにて日頃の研究成果を発表しました。ポスターセッションでは、大会参加者らと自身の研究について議論を重ねていました（写真2,3）。今回助成対象となった2名には大会初日に開催された若手研究者のための交流イベント「Young Investigator Networking Session」の受付および運營業務を担当していただきました。本イベントはまだ海外での発表経験が少ない若手会員が初日に交流し仲を深め、その後の大会でも研究交流しやすくなるための行事であり、ICHAにおいては毎回実施されている。今回助成対象となった二人には参加者としても本イベントに参加してもらいました。総勢者40名程が本イベントに参加し、二人も積極的に交流し、新しい友人もできたようでした。このセッションのサポートに加え、彼女らには会期中、タイムキーパー等の運營業務を少し手伝っていただきました。

4. 成果と今後

本取り組みでは、学生会員2名の国際会議参加の補助し、学会運営に携わる機会を提供できました。会期中両名は若手、ベテラン問わず数多くの研究者と積極的に話す様子がみられ、本サポートによるポジティブな影響は少なからずあると考えています。また今回お二人に担

当していただいた運營業務はごく一部のみでしたが、参加者が困っている様子を見ると自ら話しかけに動いたり、会場内を道案内していたりと、運營業務時間以外でも運営側として意識をもつことができたようです。「学会運営」と聞くとハードルが高く、大変な業務であるように聞こえますが（実際に中心的な運營業務はとんでもなく労力と時間を要する業務ではあるのですが）、学生のうちから運営側として学会に参加することで、学生自身が他の参加者と交流しやすくなるだけでなく、実際に将来学会を運営する場合にも取り組みやすくなるのではないかと思います。若手会員、特に学生会員の皆様には、機会があれば学会参加に加えて、学会運営補助にも挑戦していただきたいと思います。

最後になりましたが、本取り組みをサポートいただいた日本海洋学会青い海助成事業および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

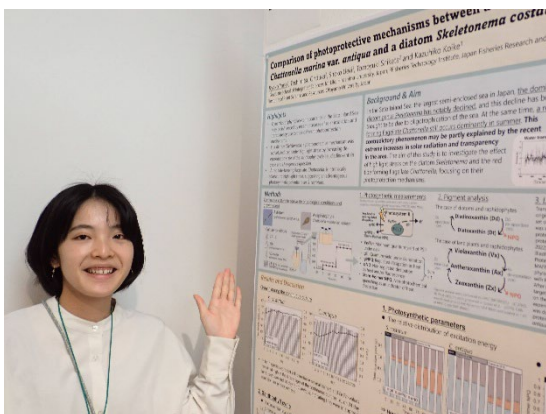


写真2 矢野 諒子会員とポスター

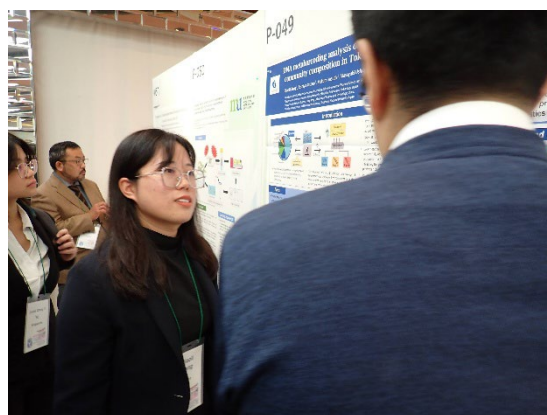


写真3 Jiang Qiao 会員
(ポスター発表の様子)